

③電源盤

外部電源及び非常用D/Gの電力は、高圧電源盤、パワーセンター、低圧電源盤を経由して各機器に供給される。また、交流電源喪失時に最低限の監視機能等を確保するために直流電源盤（バッテリーあり）が用意されている。

今回の津波襲来により、1号機から5号機までは常用系、非常用系の高圧電源盤がすべて被水しており、仮に外部電源や非常用D/Gが機能していたとしても電力を必要とする機器に供給することができない状況であった。

また、パワーセンターについても大半が被水しており、高圧電源車などの接続可能な箇所は限られてしまう状況であった。

直流電源盤の被害については、1号機、2号機及び4号機で被水したが、3号機、5号機及び6号機では被水していない。3号機、5号機及び6号機の直流電源盤は、タービン建屋の中地下階に設置されていたことで浸水被害が及ばなかったものと推定される。

建屋への大規模な浸水が生じた施設では、建屋最地下階の浸水が顕著であり電源盤の被害もこれに対応している。最地下階に設置してあった電源盤は被水の被害を受けているのに対して、中地下階（一部被水の被害を受けているものあり）に設置してある電源盤は、被水を免れた。

また、最地下階に設置してあっても、建屋周囲の浸水高に対して建屋への浸水経路となる非常用D/G給気ルーバ等の最下端が浸水高より上に設置され、浸水経路となるダクト、トレンチ等の貫通部もない箇所では、建屋への浸水がなく、設備も被水していない。5号機及び6号機の非常用D/Gや6号機の非常用電源盤（高圧電源盤、パワーセンター）などがこれに該当した。

なお、6号機については、空冷式のD/G（6B）のみならず、高圧電源盤、パワーセンターといった電源盤（非常用電源系D系）も被害がなかったことから、供給先の機器を作動継続させることができた。【添付7-4】

④屋外の被害状況

福島第一原子力発電所においては、海側エリア（敷地高：0.P. + 4 m）に設置されていたNo.1重油タンク（大きさ：直径11.7 m×高さ9.2 m、重量：32トン）が、津波により1号機原子炉建屋・タービン建屋北側の構内道路（敷地高：0.P. + 10 m）まで漂流するなど、多数の漂流物が確認されている。また、駐車中の車両も多数漂流した。

また、主要建屋設置エリアにおいては、津波によりダクトのハッチの蓋等が流失・損傷し、開口部となったのが1～4号機側（敷地高：0.P. + 10 m）で20箇所、5、6号機側（敷地高：0.P. + 13 m）で5箇所確認されている。

なお、開口部の数については、瓦礫の存在等により状況を確認できなかった箇所が多数存在することから、さらに多かった可能性がある。